

愛知県立大学学報

昭和 61年(1986)
3月15日発行
愛知県立大学
〒467名古屋瑞穂区
高田町3-28
☎ 052-851-2191

愛知県立大学

二十周年記念行事を振り返って

愛知県立大学二十周年記念事業委員会

委員長 長谷川 太郎

はじめに

去る二月九日(日)、名古屋市千種区
覚王山通りの王山会館あじさいの間で開
かれた「愛知県立大学二十周年のつど
い」を以って、昨昭和六十年秋以来の一
連の愛知県立大学設立二十周年(愛知
県立女子専門学校創立三十九周年)記
念行事は、めでたく終了した。

昭和四十一年四月の愛知県立大学発
足からちょうど二十年目を迎えるのを機
に、我々の大学の過去の歩みを振りかえ
ると同時に、その現状をよりよく認識
して将来の発展に備えよとの趣旨で企
画立案された各種の記念行事・記念事業

は、かつて本学にその例を見ぬほど多
岐にわたるものであった。

そのため、意欲は評価しつつもその実
現を危惧するむきも無くはなかったが、
幸い学内大方のご賛同とご協力を得、さ
らには学外に在る関係者の方々からも多
くのご支援を得て、計画された記念行事
をいずれも大きな成功のうちに終了す
ることができた。

みずからのはたちの節目もしかとはつ
けられぬような集団に、なんの将来展
望が許されようか——そんな思いに支えら
れながら推進されてきた二十周年記念事
業であったが、共同体の祝祭の常として、

多くの人々をその渦中に巻き込まずには
いかなかった。敢えてその渦中に入って下
さった多くの方々の善意やご労苦に対し
て、心から御礼申し上げつつ、ここに、
終了した記念行事の全貌と、今なお進行
中のものである関連記念事業の現況を、
まとめてご報告しておきたい。

記念行事

- 1 植樹体育祭(60・10・20(日)、9時半
—17時、長久手キャンパス)
- 二十周年祝賀月間(10・20—11・12)
の劈頭をかざる記念行事であるこの植樹
体育祭は、教員・職員・学生・生協の各
団体代表から成る実行委員会によって



二十周年のつどい——祝賀パーティー

準備され、例年の学生自治会によるスポーツ大会と合同する形で実施された。

当日は幸い天候にも恵まれ、参加者は約四〇〇名、立派な体育館が竣工して装いを新たにしたばかりの長久手キャンパスだが、そこがまたかつてない賑わいで一日湧いたわけである。

「祝愛知県立大学二十周年」の真新しい看板をバックに行なわれた開会式では山本学長のあいさつが述べられたあと、記念植樹を行なった。体育館更衣室窓先の陽だまりにまつ白な標柱を添えてみんなの手で植えられたのは、これまで高田町キャンパスの附属図書館北裏にあった樹高約三メートルの槇の木である。その高田町から長久手への移植には、多分に象徴的な意味や願望がこめられている。実施された競技種目および参加チーム数は、ソフトボール（一九チーム）、バレーボール（二七チーム）、硬式テニス（二六チーム）、卓球（八チーム）で、



記念植樹

県立女専設立から四十年近く経った今では、学内には本学の古い歴史を知る人はほとんどいなくなっている。とりわけ、女専——短大——女子大と目まぐるしく変化した県大設立以前の歴史は、それを掘りおこし記録しておくことが急務となってきた。——このような認識からこの座談会は計画された。



スポーツ優勝者表彰

夕方近くまで熱戦が続いた。競技終了後閉会式に移り、各種目三位までの入賞チームには賞状と賞品、加えて一位優勝チームには優勝盾が、それぞれ学長より手渡された。

2 座談会「四十年の歩みを振り返って」(60・11・2(土)、10時—13時、本館会議室)

呼びかけに応じて座談会に出席して下さった旧教員の方々は、次のとおり(敬称略)——小沢正夫、近藤春雄、八木毅、黒川新一、榎本みな子、江上秀雄、小谷善一、水谷昌平、松田節、鈴木利三、横山亮一、鈴木昇、富田弘(計十三名)。座談会は、山本学長のあいさつのもと、文学部河村寿人教授の司会のもと、たっぷり三時間にわたって続けられた。ときに懐旧の思いや隔世の感に捉えられ、またときに大学の将来を思う熱気が会場にみなぎった。和風会関係の卒業生代表三名、役職者や校史編纂委員を中心とする学内教職員約十五名も陪席傍聴し、ときおり質問や意見も述べた。

座談会の模様は逐一録音されており、それ自体貴重なドキュメントであるが、今後の校史編纂にもいろいろ重要な手がかりを提供するものとなるであろう。



座談会風景

3 ホームカミングデー(60・11・2(土)、14時より、高田町キャンパス) 前項の座談会が開かれた同日の午後、引き続き卒業生のためのホームカミングデーが開催された。

まず、大学講堂で全体集会が開かれて、学長あいさつと和風会代表長谷川文子氏の同窓会現状報告があり、続いて学部(外国語学部・同第一部)、学科(国文、英文、児童教育)に分れてのパーティーに移った。参加者は、卒業生、退職教員、現職教員あわせて全学で四〇〇名を越えたものと思われ、折から開催中であった大学祭にも大いに賑わいを加えた。

本来、こうした性質の集まりは、同窓会の主催によって開かれるべきものであろうが、それを、二十周年の機をとらえて大学主導でやらねばならなかったとこ





ホームカミングデー

ろに、本学の同窓会の置かれている極めて特異な状況が表われていたと言えよう。卒業生や旧教員への連絡も、当然のことながら、徹底というには程遠い状態であった。

なにしろ初めての試みであり、ホームカミングデーという耳なれない名称もあって、卒業生への連絡やパーティーの準備に当って頂いた各学科の教員スタッフには、戸惑いがあり、また相当な苦勞をおかけした。

しかし、この行事をきっかけとして、卒業生名簿の整備が大いに促進され、あちこちでクラス会が開かれたりして同窓会活動が活発化したことは確かであり、行事のねらいは実現され、そのための苦勞も報いられたというべきであらう。

4 公開講演会(60・11・12(火)、14時—16時、大学講堂)

秋の二十周年祝賀月間のしめくくりとして、朝日新聞論説主幹・松山幸雄氏を講師に迎えて公開講演会を開催したが、学内の教職員・学生、他大学の学生、一般市民など、あわせて約四五〇名の聴衆が集まり、盛大な講演会となった。

学長あいさつに続いて、司会の外国語学部草間秀三郎教授から講師紹介があったのち、「これからの世界と日米関係」と題する松山氏の講演が約一時間半にわたって行なわれた。

松山氏の講演は、豊富な海外体験に裏打ちされ、愉快な挿話にあふれ、単に日米関係にとどまらず縦横に世界を論じて、聴衆を飽かせるところがなかった。講演後の聴衆との質疑応答も大変活発であった。

5 愛知県立大学二十周年のつどい—講演と祝賀パーティー(61・2・9(日)、16時半—20時、王山会館)

一連の記念行事の最後に、大学にとつて最も公式の祝賀ともいふべきこの「二十周年のつどい」が、年が改まってから開催された。

愛知県、愛知県議会、県下国公立大学から十一名の来賓を迎え、十九名の旧教員、二二名の旧職員、八名の卒業生代表

に、学内の教職員、さらには学生代表も加わって、参加者総数は約一七〇名に達した。会場のスペースの関係で、出席を呼びかける範囲を当初から限っていたが、それでも会場がはち切れそうな状況となった。



平場安治前学長

記念講演



桑原幹根元知事

「つどい」の第一部は、二つの記念講演であった。学長あいさつのもと、まず、平場安治・前愛知県立大学学長が「学長在任当時の思い出など」と題して、県大将来計画案策定のころの苦勞話や、県大の前途への深く熱い思いを開陳して、大きな感銘を与えられた。続いて、二十年前の県大設立当時の知事であった桑原幹根・元愛知県知事が、老軀をおして壇上に登り、淡々と現在の心境を披瀝したのち、県大の将来への祝福と期待を語って話を締めくくられた。県大の歴史に深くかかわったお二方の、意味深い講演であった。

休憩のあとの第二部、祝賀パーティーは、県大ギター・マンドリンクラブのメンバーによるオープニング・ミュージックで始まった。学長のあいさつに続き、県知事に代って新美富太郎副知事、県会議長に代って野々山啓・総務企画委員長、県下国公立大学を代表して太田正光・名古屋工業大学長からそれぞれ祝辞があったのち、加藤龍太郎・元県立大学長の音頭で乾杯した。祝電の披露も行われた。県大の年輪を感じさせる、来賓・OB・現役入りまじっての歓談の熱気は大変なものであった。県大につながり、県大を支える人たちの大群が頼もしく感じられた。「こんな会を、県大はずっと昔に始めるべきだったんです」——旧教員の一人の言われたひとことが、記憶に今も

鮮烈である。

野村達朗・県大教員組合委員長長の祝辞のあと、小池まさる県会議員の発声で万歳を三唱して散会となり、ここに二十周年記念行事は幕をおろしたのである。

関連事業

●「二十周年記念論集」の刊行
記念論集刊行委員会（北村圭文委員長）が準備を進めてきた結果、予定どおりこの三月中に「二十周年記念論集」が発刊される運びとなっている。

●校史編纂の準備
すでに校史編纂委員会（四方寿雄委員長）が活動を開始しており、附属図書館内に校史資料室も設置された。昭和六二年度中の刊行を目指すことになりそうである。

●大学関係者名簿の整備
基本名簿ともいふべき「愛知県立大学・愛知県立女子短期大学・教職員・卒業生名簿」を、昭和六〇年度内に印刷できる予定である。

●「大学要覧」「大学概要」の作成
早急な実現は見込み薄だが、予算要求の継続等の形で、その実現を計つてゆく。

●記念絵葉書の作成
写真撮影の長谷川英紀氏（外国語学部事務室）、カバーデザインの長谷川氏（児童教育学科）のご尽力で、すでに

昨年十月、魅力あふれる一〇枚一組のカラー絵葉書が出来上った。頒価四〇〇円で県大生協で販売しているが、千部作成了たにもかかわらず、はや残部は僅少となっている。なんらかの形で増刷を考へるべき時期は近いかもしれない。

●同窓会との連繫強化
本学には女子大当時以来の同窓会として和風会があり、規約上はこの和風会が短大はもちろん県大の卒業生までもカバーする唯一の包括的組織である。しかし、県大移行後は、男子卒業生の出現などにより和風会への卒業生結集が事実上困難となり、財政逼迫のために和風会

自体がほとんど活動停止に近い状態に追い込まれていた——といった実状が判明したのも、大学が和風会との連繫のために動き始めてからのことであつた。

昨年夏何度か開かれた大学と同窓生の懇談、そしてホームカミングデーの実施が、同窓生の組織を活性化するとともに、今後の同窓会のあり方をも示唆したように思われる。部会の連合体としての県大同窓会、これがおそらく今後の方向となろう。大学としては、同窓会への窓口を明確にし、また絶えず卒業生名簿の整備を計つてゆくことが、同窓会との連繫のために必要であらう。

●大学所蔵稀こう本の復刻
稀こう本復刻委員会（矢野貫一委員長）が設置されて活動を開始しており、

その検討にもとづいて、数冊分の復刻計画がすでに立てられている。大阪などの書店と協議しながら、これらを一両年中に順次刊行してゆく予定である。

●大学の歌の選定
これについては、時機を逸したため今回は見送りとした。

記念事業カンパについて

記念事業実施の円滑化を計るために、昨年七月に学内での資金カンパをお願いしたところ、多数の方が好意的な反応を示して下さったばかりでなく、波紋はやがて学外の旧教員や卒業生にまで及んだ。その結果、カンパに応じて下さった方の数は学の内外をあわせて二二一名、金額合計は一一万五三〇〇〇円に達した。これに対して、二月末現在の支出合計は七五万五九三〇円、残額は三九万七〇七〇円となっている。

カンパに応じて下さった方々には、さらに詳しい収支報告書を差上げる予定である。

なおこのあと、残額からは校史編纂稀こう本復刻その他の事業への支出が予定されている。

事業を実施してみて、カンパの効用の大きさが実感された。カンパなかりせば、大半の事業は断念せざるを得ず、残る事業も実施に円滑を欠いたことであらう。英明な洞察力をもってご協力下さった

方々に深く敬意と謝意を表したい。

当委員会の存続について

われわれの二十周年記念事業委員会は、昭和六十年度を以って大半の使命を果たした。したが、一部の関連事業はその実施になお一、二年を要し、そのための経費支出にも当委員会はあたらねばならない。このため当委員会は、昭和六二年度末までをめぐりに継続して任にあたるのが適当と判断し、評議会の了承も得た。引き続きご協力をお願いしたい。

おわりに、二十周年記念事業の数え切れぬほどさまざまな局面で、さまざまな形でご協力下さった多くの方々に重ねてお礼を申し上げておきたい。とりわけ、長期間にわたる事業の実施に一貫して献身的な労苦を惜しまれなかつた事務局庶務課の人たちを、心からねぎらつておきたい。

